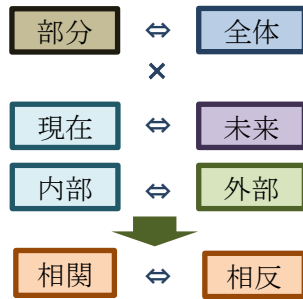


十分な思考を築くために

認識モデル



— 部分と全体、内部と外部、現在と未来、相関と相反の組み合わせで考えるのは、自らの思考バランスを図るためである。さらに、思いつき、企画、計画、行動が、社会と社会の進化に適合しているかを見る方法である。—
部分と全体、相関と相反は、思考そのものの範囲と過不足を図る。内部と外部、現在と未来は、周りに対しての適正を図る。周りをどのようにとらえているかで、自身の思考範囲が確定されている。

周りは家族なのか、仕事の仲間なのか、組織なのか、市場、社会なのかで考える条件が変わってくる。

「周り」の全体は何であるかをとらえたとき、「周り」の最大の適応範囲を示している。「周り」の全体が、考えている、視ている範囲になる。もし、全体を意識しなければ、自分の考えだけにとられやすくなる。もちろん、全体が、諸々の現象、事物のすべてをとらえているはずはない。いくつかの既存の категорияに囚われている。

カテゴリーは、習慣的なものか、一般に通用している区分である場合が多い。カテゴリー自体が変化すれば、新分野が追加されていて、日々、分類し直さなければならないと認識しておくべきだ。

一つのテーマを取り上げ、これを部分とし、その全体をとらえたとする。一年前に全体とした内容と、今、全体とした内容が同じになることは少ない。社会が変化したと気付いたか、自らの思考成長があったかである。

「内部と外部」の内部は、自分の方向、自組織を中心に考えている。外部は、自身の外、組織の外になり、自身が働きかける対象とその周辺となる。社会や市場である。

自身を中心に考えたとすれば、戦略、戦術自体が存在しなくなるし、成果を生み出せなくなる。常に自己満足で終わるしかない。外部に働きかけたその周辺を、市場内でとらえたとしたら、他市場からの影響を考慮できなくなる。市場は多数のカテゴリーの市場が重なりあって、自身の商品を軸に、一つの市場が構成されている。市場は自らの認識であって、実際の市場と一致しているかは分からない。むしろ、一致していないとした方がよい。

如何なる専門的な市場であっても、他市場の影響を受けている。専門的な市場には、専門とする特異な理由がある。業際市場としたとき、業際を作り出している際立った複数の市場がある。これらを認識しなければ、専門分野も、業際も言葉だけであって市場を認識できていない。

現在と未来は、活動は常に前へ進むとし、活動の結果が生み出す未来を想定する。

問題は未来をとらえる位置である。今、進めている商品開発が、現在商品からの発想であれば、開発が終了したときの未来は現在の延長線上にある。もし、未来が現在と違った場合は開発したものは受け入れられない。

物事は、過去から現在の軌跡を通して未来を見る。常に時系列としてとらえる。現実に従えば現在からの延長で考えてしまう。テーマ(部分)に対しての全体を小さくとらえれば、現状からの延長になる。全体を広すぎる範囲でとらえれば、未来が想定できなくなる。全体は視野の範囲でとらえるしかない。

思考できる範囲は理解の範囲である。理解できる範囲が広がれば、全体が広がり、未来での期待とリスクの関係が現れてくる。

部分と全体があつて、部分から、内部と外部を整理する。さらに、部分と全体から、現在と未来を想定する。想定された内部と外部、現在と未来の全体を検討する。この時、アンバランスが生じたとしたら、部分、外部、現在、未来のどこかに考え違いがある。再度、部分に対し、内部と外部、現在と未来をとらえ、全体をとらえ直す。

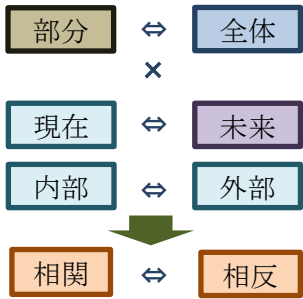
それぞれに出てきた内容について、相関と相反を加える。一つの事柄に対して、必ず類似するモノと逆になるモノが存在する。一つの事柄に対して、類似するモノと逆になるモノは一つではなく、5つ以上がある。これらをすべて合わせて、全体となる。相関と相反がとらえられて、リスク対応の準備が整う。

表した部分と全体、内部と外部、現在と未来、相関と相反を眺めてみる。そこに、矛盾が見いだせなければ、思考バランスがとれた証となる。

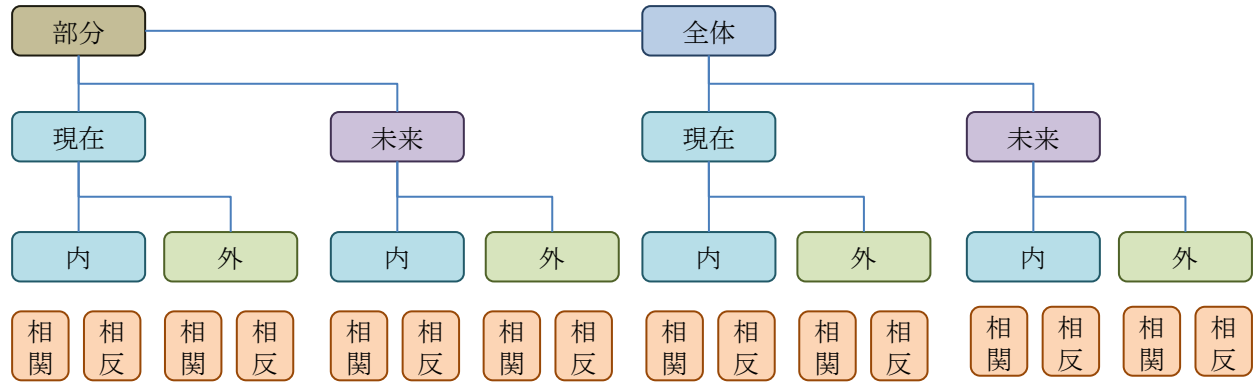
これらの作業は、初めは大変である。だが、何度か時間をかけて試みると、回を重ねるごとに思考の体系ができていく。自然に知識が構造化され、社会に向かって機能化できるようになるはずである。

十分な思考を築くために 記入例

認識モデル



思考要領を
図式化する
と



部分には、如何なる単語、語句を入れても構わない。課題にしている内容を入れて、図のように、語句を展開していく。書き表したすべてが考えている対象であり、思考範囲になる。現実的でないとする必要はない。掛け離れすぎていると思うならば、その語句をネットで検索してみると実際に存在しているかもしれない。存在している可能性が高いとしている方が安全である。

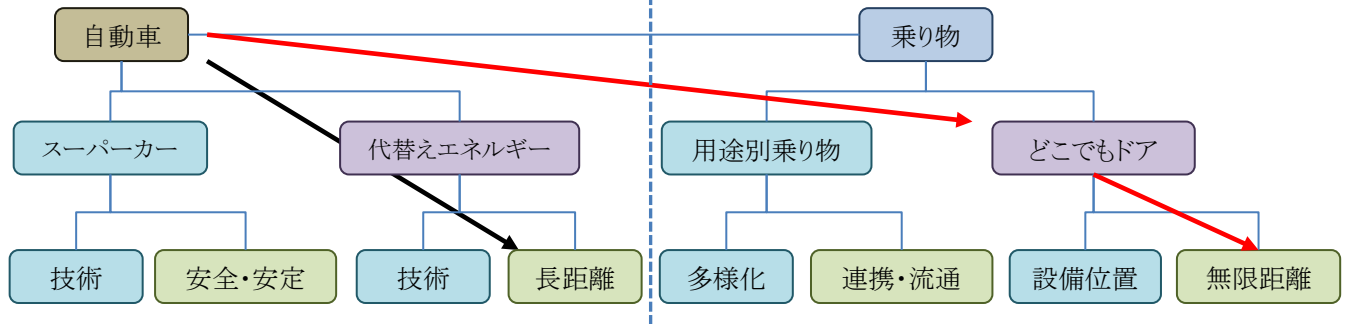
自身の考えで不可能としているのであれば、実現した場合のリスクとしてとらえておくのが良い。

蒸気エンジンができた頃は、ガソリンは考えられなかった。まして代替えエネルギーは出ていなかった。現在では、代替えエネルギーは必然になっている。エネルギー産業の構造変革が起ころうとしている。

発展性とリスク、成長と衰退、必要と不要が、常に存在する。

記入例では相関、相反を表していないが、相反に現れる事柄は他産業、他分野に属している場合が多い。自らの分野を注視するのは必然である。だが、他分野からの影響があった場合、予期せぬ現象が起こりえる。注意しなければならない分野になる。

部分の箇所に「自動車」を入れてみた。



黒の矢印は、現在の目標になる。赤の矢印は、未来の目標になるかもしれない。部分に入った「自動車」産業として、検討すべきかは分からない。しかし、社会はいずれ書き出された方向に向く可能性がある。

黒の矢印は、代替えエネルギーによる長距離移動が進められている。いずれ整うと予想される。赤の矢印は、まだ見えていないが、バーチャル社会とリアル社会の組み合わせで実現しつつある。自動車産業の構造変化が起こるはずである。

事業計画を考える場合は、他分野の人も含めて検討させる方が、より確からしさが求められる。全体と未来のとらえ方で、現在からの延長線上では、現在の商品が不要になる場合があり、将来のリスクとしてとらえられる。